イキモノノサガ

イキモノハガ

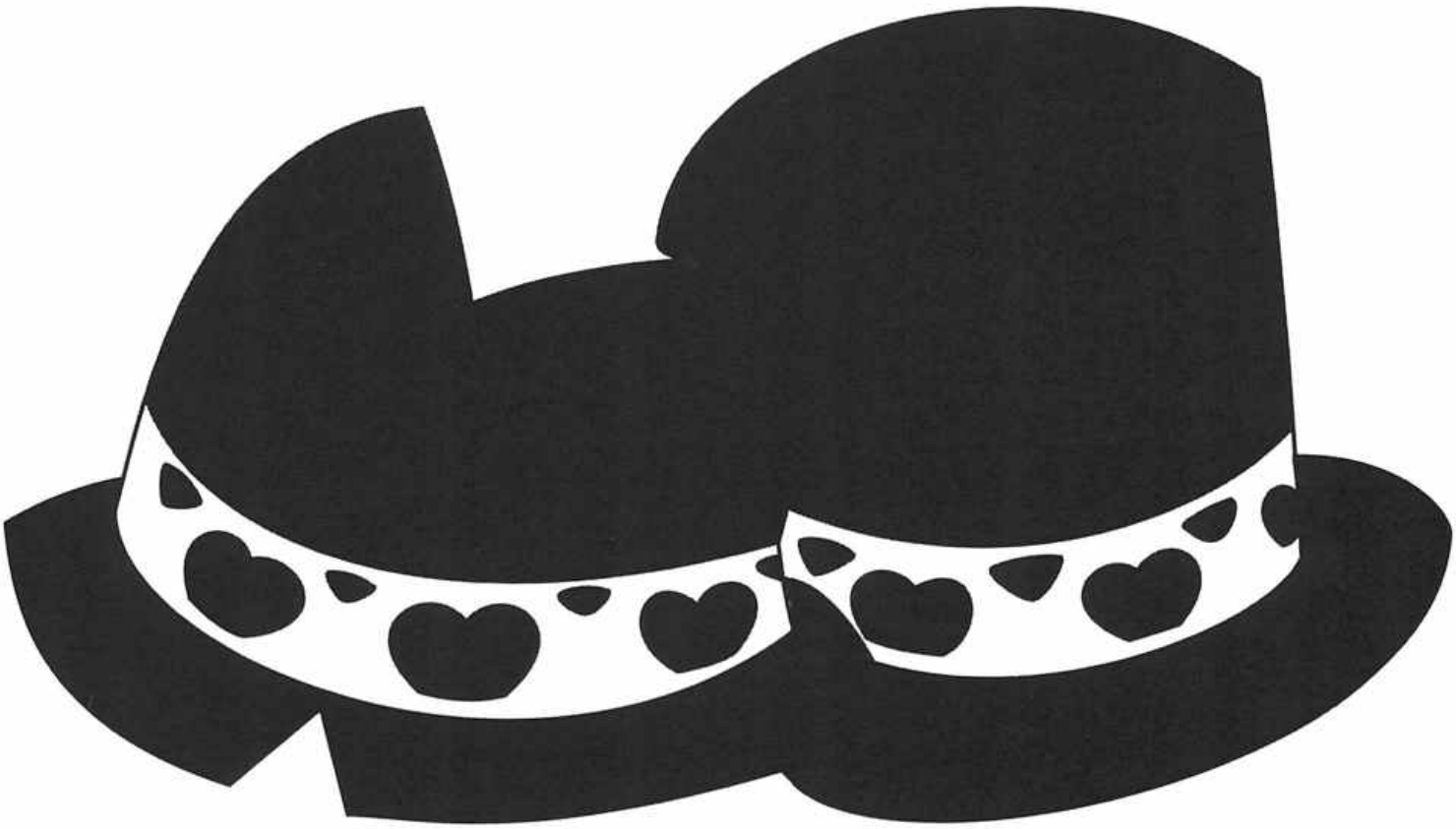
ふたごのひめはふたりでひとつ。
そろってはじめていちにんまえ。
いっしょではじめてぷりんせす。

でも、　ふたごのひめはふたりでふたつ。
あかはげんきでおっちょこちょい。
あおはかしこくすこしひかえめ。
かがみはふたりをべつにうつすし、
すきなものだってぜんぜんちがう。

でもでも、　ふたごのひめはふたりでひとつ。
ふたりでいればだいじょうぶ。
しれんもほしのききだって、
ふたりでいればこわくない。
いっしょならいつもぷりんせす。

ほんとは、　ふたごのひめはふたりでふたつ。
いつかそのひがきてしまっても、
ふたりがわらいあえますよう。

フシギボシノフタゴヒメ



「わわっ！
「いきなり入ってきちゃだめだってばー！」
「今お着替え中だったの
「お洋服のボタンはずしてー…」
「これからぱんっ下ろすところだったんだよ」

「え？このままでいいの？
「はだかんぼだよ？
「私たちの裸が見たい？ええー」
「ふふ…ちょっとはずかしいねファイン」
「うん…ちょっとねえ…えへへ」
「でもすごく見たそうにしてるよ？」
「そだね…まいっか！
「ねーねーどこを見たいの？」
「え、おまたのとこ？」
「んと…おまたはこうなってるんだよ」
「ここからおしっことかだすの」

「え？さわってあげる？」
「でもそこ…きたないよ？
「さっきおしっこしたばっかだし…
「え…あっ！」
「ふ…くふふふっ！」
「やはっ…
「こちょこちょしてるぅ」
「くすぐったいー
「えへへへ」
「あはははは…」
「は…あぅ…」
「ファ…ファイン…
「私…なんだか…
「ん…あ…しインも…？」
「へんな…感じ…
「なんか…これ…」
「気持ち…いいよね…」
「うん…むずむずする…」
「くちゅくちゅ…
「もっとくちゅくちゅして…」
「私も…おまたぁ…」

「レイン…私…なんか体熱いよう…
「私…も…だめ…気持ちいい…
「なんかきちゃうよ…ファインん…」
「うん…おまたのとこ…
「もっとこすって…もっと…」
「あ…あ…！」
『あああああっ…！！！』

「あ…あふぅう…う…」
「はー…はー…はー…」
「ふぅ…ふぅ…」
「ひぅ…はぁ…」
「…今の…何だったの？」
「すごい…気持ちよかった…」
「え…”いく”っていうの？」
「おまたこするとああなるの？
「私たちでもできる？」
「できるんだ？そっかぁ…
「今度やってみよう、レイン」
「そうね…恥ずかしい気もするけど
「えへへっ」

「ん？どしたのお兄さん」
「…お兄さんも気持ちよくなりたい？」
「そうか、そうだよね！
「私たちに任せて！」
「お礼に二人でおまたこすってあげる！
「ほら一早く脱いで縫いでー
「…って…わわっ！」
「えええ、なにこれぇー？」
「れれしイン知ってるでしょ？」
「ふぁふぁファインこそ！」
「しし知らないよこんなおっきいの！
「なんでおまたにこんなのあるの～？？」
「あ…おまたって…
「男の人はちんちんがあるんじゃあ…」
「あ、そか…じゃこれちんちん？？」
「ちんちんて…こんな大きいのね…」
「うん…びっくりだよ…」

「もしかしてこれこすればいいのかな？」
「あ、そうだね！シイン頭いい！
「こんな出っ張ってるんだしね！」
「よーし、んしょ、んしょっ」
「ちんちんてすごいねー
「私たちの手よりずっと大きいよ！」
「どくどくいってておもしろいしー
「でもこれで気持ちいいのかな？」
「ふふ、お兄さん気持ちよさそうみたい」
「じゃあいいんだねっ」
「もっとこすってあげましょファイン」
「おー！」

「棒のところを行ったり来たりー」
「皮がぐにゃぐにゃして面白いわね」
「なんかびくびくしてきたよ？」
「きっともうすぐ”いく”んだわ」
「よーしいけいけー」
「いっぱい気持ちよくなってー」
「…わわ！」
「…きゃっ！」
「ななにこれ？」
「おしっこ？」
「でも黄色くないよ…？どろどろしてるし…」
「…え、精液っていうの？気持ちいいと出る？」
「そうなんだ…じゃあうまくいけたんだね」
「やったねファイン！」
「うん！」

「…でもどろどろのままじゃだめだよね…」
「そうね、おそうじしなきゃ」
「…え？おくちでするのがいいの？」
「精液は舐めてごっくんするもの？」
「そうなんだ…じゃあそうしなきゃね」
「ん…んんぅ…」
「ふぅ…はぁ…」
「おっきいからお掃除も大変…」
「棒のとこにも下の袋みたいなとこにもついてるね」
「…あれ？なんかまたびくびくしてきたよ？？」
「堅くなってきたし…また気持ちいいのかな？」
「舐めても気持ちよくなるんだ？へぇー」

「ねえファイン…またお兄さん気持ちよくさせてあげよう？
「いいことするのはきっといいプリンセスだもの」
「そうだね…お兄さん、楽しいことばっかりしよーね！」
「…先っぽのくびれたところ？そこが気持ちいいの？」
「じゃあいっぱい舐めてあげるね」
「私たち二人のしたべろでいっぱい気持ちよくなってね」

「あ…また精液でたよ…」
「いっちゃったんだ…ふふ、2回目だね」
「…レイン、さっきより精液多くないかな？」
「きっと私たちのしたべろが気持ちよかったのよ」
「そっかー、ざらざらしてるのがよかったかな？」
「ふふふ、そうかも」
「…精液が出るのを射精って言うの？へぇ…」
「じゃあお兄さんは私たちで2回射精したんだ」
「…精液、ほんとねばねばだね…」
「まっしろでくさいしねぇ…」
「味も変だし」
「ちんちんて変なものが出るんだねぇ」
「あ、そういえばまたお掃除しなきゃだめだね」
「あ、そか…でも舐めたら射精しちゃうよ？」
「お掃除終わんないね…どうしよう？」

「…え？お掃除いらない？」
「横になるの？いいけど…」
「え？えええええ？？？
「なにしてんのお兄さん？？」
「ふぁふぁファイン…！
「ちんちんがファインに入ってきてる！
「お、お兄さん…あの…え？
「…さっきより気持ちよくなれるの？」
「…ほんと？ファイン…？」
「ん…しイン…またむずむずしてきた…
「ほんとに…手でこすられるより…」
「あ…もっと入ってく…」
「んぁ…うぅ…お兄さん…
「ちんちんもっと入れて…
「私…またいきたいよぉ…

「あ…！おまたに…ちんちん…！
「いったりきたりしてるぅ…
「ちんちん熱いよ…気持ちいい…
「ふ～ああ…いく…いっちゃう…！
「やあああああっ！！！」
「…ふ～っ…ふ～っ…
「ふ～う…う…」
「あ…まだ…射精…
「精液…中で出てる…
「どくどく…どくどく…
「ちんちんと…せいえきで…
「いっちゃったよう…

「ふぁ…ファイン、そんなに気持ちいい？
「ちんちんおっきくていれるのちょっと怖いんだけど…」
「だいじょーぶー、精液でぬるぬるだから入っちゃうよ」
「そ、そうね…
「お兄さん…私もファインみたいにいきたい…
「私にもちんちん入れて
「それで、私の中で射精して…」
「あ…う…！
「すごい…ちんちん太いよぉ！
「私のおまたの中で…ぐちゅぐちゅって…
「くびれてるところがあたってるぅ…
「ほんとに…触られるより気持ちいいよぉ…！」

「ああ…来ちゃう…また来ちゃうよぉ…
「おまたに射精されていっちゃうぅ…！
「ああ…！にああああああ…！！！
「はふ…ふ…ぅ…
「精液…びゅるるって…中で…わかる…
「どぽどぽ…あふれてる…
「気持ちいい…こんなの初めてだよぅ…」

「…ねえファイン…」
「ん？どしたのレイン」
「私…またいきたいかも…」
「…へへ、実は私も…」
「くすくす…じゃあお兄さんにたのもっか」
「そうだね」
『お兄さん、また私たちで射精して欲しいの…』
「さいこーだったね、レインー」
「うん…おまたってこんな気持ちいいんだね」
「あ…精液出てきちゃった」
「私も…」
「おそろいだねレイン」
「えへへ」

「…なーんてことがあったよねファイン」
「そうだよねレイン」
「それからずっとえっちたくさんされちゃって」
「もーセックスしてばっかだったよね」
「フェラの方が多くなかったかしら？」
「フェチっぽいよねー」
「まあ変態だものね、ふふふ」
「そーだよねー、足でされるのがすきなんて！」
「ほら、踏んだらまたびくびくいってるわ？」
「うわー、ほんとしょうがないちんぽ！」

「ファイン、もっとぎゅーぎゅーふんじゃえば？」
「えー、だいじょうぶかな」
「この靴柔らかいからそっちのが気持ちいいみたい」
「ふーん、変態くさいなぁ…えいっ！」
「私も、ぐりぐりー！」
「ほらっ！プリンセスに踏まれるの気持ちいい！？
「ふしぎ星一番のえっちなプリンセスの足だよ！」
「お兄さんのせいでなっちゃったんだからね～
「まあ、知識も経験もないけど」
「でもキャラとハートでカバーしてあげるから…
「ののしられてだらしなく射精しちゃえっ！」

「ほらー、股で挟んだりもしてあげるわ
「おまたの感触もあって気持ちいいでしょー
「ふふ、腰がくがく動いてるよ
「ファイン、このままぐいって踏んであげて」
「うん…ほらほらっ、お兄さんどう？
「ちんぽの先ぱくぱくいってるよ？
「ガマン汁も出まくりだねっ」
「ふふ…プリンセスのすまたと足コキだものね
「すぐ射精しないのが不思議なくらいよ」
「ま、今日はこれで５回目だもんね」
「６回じゃない？」
「うーん？とにかくよく出たよねぇ」

「ま、この人変態だもの
「私たちが裸で踏んでやればいくらでも出すわ」
「レインびーい…ほんとだけど、ふふ」
「ほらまた出るんでしょ？
「私たちのおまた見ながら射精していいのよ」
「出しちゃえ出しちゃえ！このすけべ！」

「あ…出た出た、また出したわ」
「うわさっきより多いかも…精液多すぎない？」
「いつも私たちのえっちな妄想してるんだものね、お兄さん？」
「ああ、それで溜め込んでるんだぁ」
「だから踏まれるたびに射精しちゃうんでしょう？」
「私たちの言葉責めそんなにいいんだー」
「ふふ…へ～んたい！えろちんぽ！」

「うわ…靴ぐちょぐちょになっちゃった」
「ちんぽも精液まみれじゃん…くさーい」
「しょうがないわね…とりあえずお掃除しましょ」
「あ、お兄さんまだ終わりじゃないからね？」
「そうそう、今日は最低10回は射精よ？」
「へへ、顔にやけてるよー？えろすぎー」
「ほんとにもう…ちんぽ痛くならないのかしら」
「こんだけこすったり踏んだりしてるのにねー」
「
「お掃除終わったらまた踏んであげるからね？」
「でもしイン、その前に出ちゃうんじゃない？」
「そっか。このひとフェラ弱いものね」
「その場合はカウントしないからねー」
「今度は素足で踏んであげよっか？」
「ドレスのタイツがいいんじゃないかな？」
「そういえばドレスに射精したいとか言ってたね」
「変態くさいよねー」
「だいじょうぶ、やらせてあげるから」
「ちんぽびくびくさせて待っててね、変態さん」

あとがき～こんなんでもいろいろかんがえているんだ。～

えー、ということで巷で評判のふしぎ星のふたご姫というアニメに
精一杯妄想を詰め込んでみました、というおはなしなのですー。ですー。

でまぁなんというかですね、えろまんがというものにも
思うに色々種類があるわけでですね
そのひとつに相手役をどうするかというのがありまして一。

この辺大変作品によりけりでして、たぶん少しでも女の子を性的に見ている
キャラクタがいればとても適任なのでしょうが、
いざふしぎ星の男どもを見てみますとファインレインのことを
プリンセスとは見てるけど女の子として見ているかという観点では
うーん、と思うわけです。
かっこよく言ってしまうと男性性の存在しない世界なのではないだろうか！か！
いや子供向けアニメだから当たり前なんだが。

まーそれでも自分中で整理なりキャラクタに愛情があればできるんでしょうが
（それで描いてる作家さんもいるでしょうしー。）
一番使いやすそうな位置にいるブライト君やらエクリプスさんは
僕的にはなんか見るたんびにこのやろうとか思うわけで
ティオはキャラ的にいいのだがあれでマンガ描くとむしろ違うお話になりそうだし

…今思ったがファインレインにティオが散々弄くられるという話ならいいかも…

閑話休題、あとメラメラの国の王様とかもいいですが私は描く自信がありませんあの顔。

まー結局のところ、先ほどもいったように子供向けアニメの世界観で完結しているので
劇中キャラだけでえちやらせるとなんだかゆがみが出てしまう気がして
でもファインレインにえちしたい（というかののしってください）というのはあるわけで
ううむどうしよう、と思ったあげく
今回の本みたいに男はシルエットでー、セリフもふたりだけでー、
と言う形に自分なりに落ち着きました。

というか普通に劇中っぽくやろうとしたらファインレインが
なじりながら足でなんてしてくれなさそうなので
それができないと意味がありません（おい

まーふたご姫はまじょっこものなので
プロミネンスを使えばなんでも出来てしまうという荒業はあるのですが
なんかそれも情緒がなぁ、とか思ったり、
いやぶっちゃけその辺のネタ使うと絶対に他の作家さんとかぶるってのが大きいんだが。
その辺の関係で妄想かきたてられるふたご節もあんまいれてません
（「やっちゃう？」「やっちゃう？」「やっちゃおー！」とか）

総じて「原作の世界観を極力壊さないようにしつつ、ファインレインとえち」
というコンセプトちゅことかね。
絵物語形式なのもその辺の理由です。
（これ以外のやり方では原作が壊れる、とか言ってるわけではないよ念のため。）

結果として上手くいったかといわれると
中身のないまんがになっただけじゃないかという気がしなくもありませんHEHEHE(;´Д`)

ま、この作品、子供向けアニメという観点では本当にいいものだと思うので
（難しいテーマを使うことも多かったどれみより、そういう点ではお子様が楽しめそう）
今後もがんばって欲しいですねん。

どうでもいいけどムーンマリア様は何度見ても爆笑してしまうんですが仲間いませんか。

ということでかなり頭が悪い本になった気がするので最後くらいちょっぴり真面目に。
少しでも楽しんでいただけたら幸いですー。

あーレインになじられたいなー（レイン好き）

「イキモノノサガ」
発行：KEYTRASH 緋鍵龍彦
発行日：20050619
印刷：ポプルス様
http://scarletkey.sakura.ne.jp/
keytrash@scarletkey.sakura.ne.jp

イキモノノサガ

フシギボシノフタゴヒメ ファンブック

ハッコウ キートラッシュ

アダルト
オンリー